

11 解空間の次元

11.1 同次形の連立 1 次方程式の解空間と基本解

連立 1 次方程式の解空間の次元についてまとめる．連立 1 次方程式 $Ax = 0$ の解空間を W とする (A は $m \times n$ 行列) W の次元は, x_i のうち値を自由にとれる (c_i) 個数 (解の自由度) に等しく, これは A の簡約形 B の行の主成分を含まない列ベクトルの個数に等しい．つまり,

$$\dim(W) = n - \text{rank}(A)$$

が成り立っている．これにより次の定理を得る．

定理 11.1 (教科書 p.84, 定理 4.4.3)

A は $m \times n$ 行列とする．同次形の連立 1 次方程式 $Ax = 0$ の解空間

$$W = \{ \mathbf{x} \in \mathbb{R}^n ; A\mathbf{x} = \mathbf{0} \}$$

の次元は

$$\dim(W) = n - \text{rank}(A)$$

で与えられる．

定義 11.1 同次形の連立方程式

$$Ax = 0$$

の解空間の一組の基を $Ax = 0$ の基本解 と呼ぶ．

例 11.1 例 10.3 の同次形の連立方程式：

$$W = \left\{ \mathbf{x} \in \mathbb{R}^5; \begin{array}{l} x_1 - 2x_3 + x_3 + 2x_4 + 3x_5 = 0 \\ 2x_1 - 4x_2 + 3x_3 + 3x_4 + 8x_5 = 0 \end{array} \right\}$$

の一組の基として

$$\mathbf{a} = \begin{pmatrix} 2 \\ 1 \\ 0 \\ 0 \\ 0 \end{pmatrix}, \mathbf{b} = \begin{pmatrix} -3 \\ 0 \\ 1 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix}, \mathbf{c} = \begin{pmatrix} -1 \\ 0 \\ -1 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix}$$

が取れるので, $\{\mathbf{a}, \mathbf{b}, \mathbf{c}\}$ がこの方程式の基本解である．

11.2 ベクトルの集合で生成される部分空間

ベクトル空間 V の部分集合 $\{\mathbf{u}_1, \dots, \mathbf{u}_m\}$ の 1 次結合の全体 :

$$W = \{c_1\mathbf{u}_1 + \dots + c_m\mathbf{u}_m \mid c_i \in \mathbb{R}^n\}$$

は V の部分空間で , これを

$$W = \langle \mathbf{u}_1, \dots, \mathbf{u}_m \rangle_{\mathbb{R}} \text{ または } W = \langle \mathbf{u}_1, \dots, \mathbf{u}_m \rangle$$

と書く . 定理 10.2 (教科書 定理 4.4.2) により

定理 11.2 (教科書 p.84, 定理 4.4.4)

$\dim(\langle \mathbf{u}_1, \dots, \mathbf{u}_m \rangle) = \mathbf{u}_1, \dots, \mathbf{u}_m$ の 1 次独立なベクトルの最大個数

となる .

ベクトル空間の次元 $\dim(V) = n$ がわかっているとき , $\{\mathbf{u}_1, \dots, \mathbf{u}_m\}$ が基になっているためには , V の任意の元が $\mathbf{u}_1, \dots, \mathbf{u}_m$ の 1 次結合でかけるか , $m = n$ で $\mathbf{u}_1, \dots, \mathbf{u}_n$ が 1 次独立であればよい .

定理 11.3 (教科書 p.85, 定理 4.4.5)

$\dim(V) = n$ とする . V の n 個のベクトル $\mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_n$ について以下の 3 条件は同値である .

- (1) $\mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_n$ は V の基 .
- (2) $\mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_n$ は 1 次独立 .
- (3) $\langle \mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_n \rangle = V$

証明

(1) \Rightarrow (2) は基の定義から明らか .

(2) \Rightarrow (3) を示す . V の次元は n なので 1 次独立なベクトルの最大個数が n . よって $\{\mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_n\}$ にどんなベクトルを加えても 1 次従属で , このとき $V = \langle \mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_n \rangle$ となっている .

(3) \Rightarrow (1) 定理 9.1 (教科書 定理 4.3.1) より V の 1 次独立なベクトルの最大個数 ($= n$) は $\mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_n$ の 1 次独立なベクトルの最大個数以下 . これは $\mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_n$ が 1 次独立でなければ成り立たない .

□

例 11.2 (教科書 p.85, 例 7)

次の 3 つの \mathbb{R}^3 のベクトルたちは 1 次独立であるので, \mathbb{R}^3 の基になる.

$$\begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ 1 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \\ 1 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 0 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix}$$

実際, この 3 つを列ベクトルとする行列は

$$\begin{pmatrix} 1 & 0 & 0 \\ 1 & 1 & 0 \\ 1 & 1 & 1 \end{pmatrix}$$

で簡約形は単位行列である. よって $\text{rank}(A) = 3$ となり, これらの列ベクトルは 1 次独立.

例 11.3 (教科書 p.85, 例 8)

$\dim(\mathbb{R}[x]_2) = 3$ で, $1, x, x^2$ が基だったが, $f_1 = x+x^2, f_2 = 1-x^2, f_3 = x$ の 3 つのベクトルを考えると

$$\begin{aligned} 1 &= f_1 + f_2 + f_3, \\ x &= f_1 + f_2, \\ x^2 &= f_1 - f_3 \end{aligned}$$

となるので, f_1, f_2, f_3 は $\mathbb{R}[x]_2$ の基になっている (任意の $\mathbb{R}[x]_2$ の元は f_1, f_2, f_3 の 1 次結合で書ける.)

練習 11.1 次のベクトル空間 W の次元と一組の基を求めよ

$$\begin{aligned} (1) \quad W &= \left\{ \mathbf{x} \in \mathbb{R}^5 \mid \begin{pmatrix} 1 & 1 & 1 & 1 & 1 \\ 1 & -1 & 1 & 0 & 2 \\ 2 & 1 & 2 & -1 & 5 \end{pmatrix} \mathbf{x} = \mathbf{0} \right\}, \\ (2) \quad W &= \left\{ \mathbf{x} \in \mathbb{R}^5 \mid \begin{pmatrix} 2 & 0 & -1 & 3 & 4 \\ 1 & 2 & 3 & -1 & 5 \\ 3 & 1 & 4 & -7 & 10 \end{pmatrix} \mathbf{x} = \mathbf{0} \right\}, \end{aligned}$$